

浄土

1992-4

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省特別扱承認雑誌) 第三二五号
平成四年三月二十五日印刷
第五十八卷
四月号
平成四年四月一日発行





四月の秀句

石上も冷たからずよ春霞

高浜 虚子

夜に入れば月明かや花曇

高浜 虚子

海に沿ふ一筋町や鳥曇り

高浜 虚子



念仏におきては、命を極むるにいたるまで、称念するにその煩いなし。

——『念仏大意』

目次

＝連載＝

生も死も悦べる世界(五)……………須藤隆仙……(2)

にここ法話

おどろきの花まつり……………長谷川岱潤……(9)

(ひ)(と)(く)(ち)(俳)(話) [12] 開帳……………(16)

〈読者のページ〉

観音さま(下)……………上野浩……(17)

季語やぶにらみ (22)

……………木下隆一……(25)

壬申の年(2)

表紙絵 小林治郎画

連
載

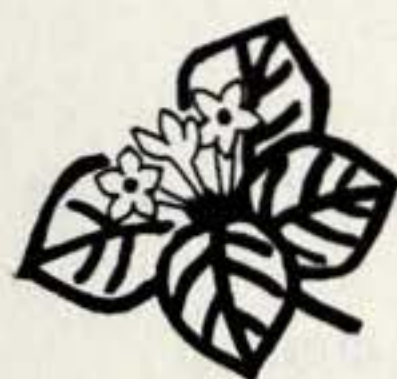
生も死も悦べる世界(五)

離れ難き輪廻

さて、人間としてこの世に生まれた有難さ、本願ということに気づかせて頂いたこの幸せ、また道心という仏教への道を知った尊さなどを、拙い筆で述べてきたわけがあります。次は「離れ難き輪廻りんねの里を離れて」というお言葉であります。これについて、少し考えてみたいと思います。まず、輪廻とは一体どういうことでありましょうか。中村元博士監修『新・仏教辞典』（昭和三十七年、誠信書房）を見てみますと、次のように記さ

須す
藤どう
隆りゅう
仙せん

（函館市称名寺住職）



れてあります。

「梵語サンサーラの訳。流転^{るてん}とも。インド古来の考え方で、人間が生死を繰り返すことをいう（転生^{てんしやう}）。仏教では、三界（欲界・色界・無色界）・六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）に生死^{しやうじ}を繰り返すことをいう。六道は現代的に考えれば、怒り・貧欲・愚痴・争い・喜悅などの意識の段階を出入りすることを指し、そうした出入りを繰り返すのが人間というものであるということになる」

こう記して関連項目として「再生」を示してあります。そこで再生のところを見ますと、次のようにあります。

「一旦死んだ者が再びよみがえること、信仰に入って新しい生活をはじめること、あるいは再びこの世に生まれることなどの意に用いられる。インド固有の思想としては輪廻思想があるが、仏教はこれを取り入れ、業説^{ごうせつ}（カルマの思想）に基づいて仏教独特の輪廻説を立てた。すなわち過去の善悪の業が現在の善悪の果報を生じ、さらに現在の善悪が未来の善悪の果報を招くということである。悪業をしたものは地獄・餓鬼・畜生などの

悪趣に生まれるが、五戒を守るものはその果報として人間界に再生し、また天界に生じ、よく法（仏陀の教法）を聞き実践するものは業を断ち切つて輪廻（六道）を離れ、悟りの世界に至ると説く。後に大乘仏教の時代になると利他思想を強調し、自利利他を円満した菩薩は衆生済度のため、種々の形をとつて人間界に還つて、迷える人々を悟りの世界に導くと説く」

記述がちよつと専門的でお解りいただけない部分があるかもしれませんが、もつとやさしく書いたものも見てみましょう。宮元啓一著『仏教四〇〇おもしろ語辞典』（昭和六十二年、春秋社）という本に「輪廻」として、次のようにあります。

「死んでは生まれ変わり、また死んでは生まれ変わり、また死んでは生まれ変わりということを、無始以来、さとりを得て涅槃（ねはん）に入るまで繰り返すこと。流転とも訳される。また、生死（しやうじ）と同義語である。生まれ変わり先の境涯のことを道（どう）とか趣（しゆ）という。ふつう、よくない境涯のほうから、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天の六道を教える。いわゆる六道輪廻というわけである。ただ、じっさいには、阿修羅は性格があいまいで、これをぬかした五道で説明されることが多い。地獄、餓鬼、畜生は、いったんここに堕ちる

と、なかなか人に生まれ変わることができないので、まとめて三悪道とか三悪趣とか三途とか呼ばれておそれられている」

以上の説明を考えてみますと、輪廻ということの意味は、とても複雑なものであるように思えるのです。

まず、いろいろな迷いの世界をぐるぐると廻っているのが輪廻だというわけですが、それは「死んでは生まれ変わり、また死んでは生まれ変わり」ということだといい、あるいは「怒り・貧欲・愚痴・争い・喜悅などの意識の段階を出入りすること」でもあるということです。ですから、輪廻は現世の中にもあり、過去世にも未来世ともあるということです。

そうになると、ちよつと問題が出てくると思います。現世で怒りや争いの世界を繰り返すのを離れるということが、「輪廻を離れる」ことだというのはまあまあ解るとしても、生死を繰り返すことを離れるということは一体どういうことでありましょうか。人によつては、生死を繰り返しているからこそ良いのではないか、生死を繰り返さなかったら終わりではないかなどと、言い出す人がいないとも限りません。現に私はある方から、「極楽という楽しみばかりの世界はつまらないと思う。苦も楽もあるほうがいいのだから、

自分は極楽などへは行きたくない。娑婆しゃばでけっこうだと思ふのですが……」という質問を受けたことがあります。

しかも、お釈迦様は「輪廻を離れよ」と教えておられる。法然上人も前記のように、離れ難い輪廻の里を離れられることは、悦びだといっておられる。ここに何か重大な重大な鍵が秘められていると、こう思わざるを得ないのであります。

その重大な鍵とは何でありましょうか。それについては、愚凡の私なりに、次のような解釈をしているのであります。

輪廻という語は前記辞典でお分かりのように、サンサーラという梵語（古代インド語）を漢字に訳したものである。その訳は「流転」でもいいといふのですから、湖水に捨てられた草のように、根が定まらない、フワフワとどこにでも流れて行ってしまう、そんなものなのであります。しかも困ったことに、その捨てられた草は、根が定まっていますから、水面にあるということとで急に枯死しないにしても、花が咲き実を結ぶというようなことではないわけであります。草の生命にとって一ばん大切な結実ということがない。

人間の輪廻ということは、正にこのようなことなのではないでしょうか。宇宙という大生命の湖水に、フワフワと浮かんでいる。風に弄もてあそばれ、浪に弄ばれて、あっちへブラブラこっちへブラブラとして生きている。即座に死にはしませんが、根が定着していませんか

ら、本当の人生というものの結実がない。世に出てきて結実がないということは出来損そこないであります。

増上寺のご法主台下で大僧正であられた椎尾弁匡博士は、共生主義ともいきを創唱され、「出来損いになつてはダメだ、出来損いになつてはダメだ」とやかましく言われました。そして「真人生に生きよ」ということを繰り返し教えられたのです。実は、この真人生ということこそが、本当の人間として花開き、実を結んだということでありまして、そこへ到達できたことが、即ち輪廻を離れたということであろうと、このように私は解釈しているのです。

さて、ここでまた問題が出てまいります。「真人生」とは、一体、具体的にどういうことをいうのでありましょうか。それは実は先に転記いたしました『新・仏教辞典』の「再生」のところの説明に記されているのであります。末尾のほうに、「自利利他を円満した菩提は衆生済度のため、種々な形をとつて人間界に還つて、迷える人々を悟りの世界に導く」とあります。これこそが「真人生」のすがたであります。

仏教の窮極はこの自利利他ということにあるのです。自利とは自分から目覚めて自分を益すること、利他はその目覚めから出発してさらに他をも益していく道であります。これを完全に完成された方が仏であるといわれ、菩薩はそれを求めて修行邁進している人をい

うのであります。

以上の説明ではまだまだ抽象的ですので、もっとくだいて申し上げますと、つまり私たち人間というものは、全くの個人だけで生活しているものではなく、互いに助け合つて共存しているものなのですから、自分を利するだけではなしに、当然のこととして他をも利していなければならない。しかもそれがいい加減ではなく、徹底したものでなければならぬということでありまして、そのために我利我利だけの迷界から抜け切らなければならない、それが輪廻を離れる、輪廻から解脱するということなのであります。輪廻を離れるということには、以上のような意味があると思うのであります。

それで、後に詳説しますが、浄土宗では、その輪廻を離れるということも、みな南無阿弥陀仏のお念仏の効用によつて離れさせて頂く、お念仏によつて輪廻から離れることができる。自力ではなく、お念仏という他力によつて離されてもらうのですから、そこが他力本願ということで、他力とは即ち仏力のことなのであります。

仏力によつてこんな重大なことを成し得る、それがまたこの上なく有難いわけであります。善導大師は、この理を、念仏して極楽往生して「彼の^か国に至りおわつて、六神通を得て十方界に入^{かえ}つて苦の衆生を救^{くしやう}摂せん」（発願文）とお示しになられたのであります。

（つづく）

おどろきの花まつり



はせがわ たいじゆん
長谷川 岱潤
(東京・品川区戒法寺住職)

四月七日の晩、ミーちゃんの家ではいつものとおり花御堂作りが始まりました。お母さんが前もって、お彼岸にあがったお花を花のところだけを切って、冷蔵庫に保存してましたので、お花はたくさんあります。お父さんは物置から、花御

堂を出してきて組み立てました。

「お母さん、半紙とハケとそれからお水を持ってきてちょうだい」

「ええ、それにやつぱりやまと糊も必要ですよ」

「ミーちゃんとチーちゃんも、ご本堂に

集合だよ」

「ハ―イ、今年も私が正面になるんだ」

「今年は、私よ」

ミーちゃんの家では、花御堂の屋根が四面あるので、お父さんとお母さんとミーちゃん、チーちゃんがそれぞれ一面づつ担当して、一番センスのいい、良くてきたところをその年の正面にすることになっているのです。

「今年はお父さんだって、ガンバルぞ」

「や―だ、お父さん、やる気だわ」

「お母さん、今年も菊ときんせんかばかりね」

「そんなことないわよ、いつもよりはカーネーションとか、スイートピーとか、ほらランだってあるじゃない、お花

も大きいし、今年は期待できるわね」

「それじゃ始めるぞ、スタート」

白木の屋根に半紙を広げて置き、上からハケで水を塗って貼り、その上にお花を糊でくっつけて並べてゆきます。

四人はもくもくと製作を始めました。

「お父さんずるい、大きい花ばかり使っている」

「そうか、使いたいのがあつたら取っていいぞ」

「ううん、いいんだけど、今年は何かうまくできないなあ」

ミーちゃんが不安げな顔でつぶやきました。

「どれどれ、ううん、華やかさが足りないなあ。ほう、チーちゃんのは力作だね

え。やたら花が多いね」

「お父さんに言われると一番ショックよ。へえ、お母さんのつて、いつも几帳面な形になるのね。それに比べると、お父さんののは何が何だか分からないわねえ。何か考えあるの」

「何もないよ。ないからこそ、こういうのを芸術と言うんだぞ」

「まさか」

四人は大笑いし、結局今年は四人で協議した結果、チーちゃんの面が正面に決まりました。

開けて八日、本堂の前に花御堂を出し、甘茶を作って桶に入れ、お釈迦さまの誕生仏の中に納めて出来上がります。

ミーちゃん、チーちゃんも今日は始業

式、学校に行く前に、甘茶をかけて花御堂にお参りしました。

夕方ミーちゃん、チーちゃんがお部屋にいと、何かお母さんのびっくりした声が聞こえました。

「お母さん、どうしたの」

二人が飛び出してゆくと、お母さんは頬を赤く染めて、大きな花束を持って立っていました。

「どうしたことやら、お父さんが急にこれをつて」

お母さんは驚いて言葉になりません。

「ミーちゃん、チーちゃんも来てくれたか。ちようどいい、お前たちにもあげよう。ハイこれ」

お母さんのよりはだいぶ小ぶりでした

が、きれいな花束を二つ差し出しました。

「ええ、お父さんステキ！」

チーちゃんは飛び上がって喜びました。

「どうしたのお父さん、なにかあったの」

ミーちゃんは驚いて尋ねました。

「そんなに驚いちゃったかい、そうだろうなあ。お父さんも花束買うのなんて、

生まれて初めてだもんね。実はね、前から

考えていたんだけど、なかなかできなくてね。今日はほら、花まつりじゃない

か。お父さんは、花まつりという日に男

性が愛する人にお花を送る日だと位置付

けたら、ステキだなあって前から思っ

ていたんだ。それでプレゼントしたんだよ。

「ステキなあ」

「ステキね。でもどうしてそんなふうに

なるのかしら」

お母さんはまだ、信じられないという

顔で聞きました。

「お釈迦さまのお誕生日のことを、昔は

仏誕会とか降誕会とか言ってたんだけど、

明治時代の浄土宗のお坊さんが、

『花まつり』と命名したんだそうだと

てもステキだよ。でもやってることは

以前とちっとも変わりなく、花御堂を飾

るだけなんだよ。

それにちよつと難しくなるけど、昔、江

戸時代までは旧暦だったから、この四月

八日は卯月八日と言って、今のちようど

五月の終わり頃だから、田植えの時期と

一致したんだね。そこで卯月八日の神迎

えの行事と一致して、それはそれは大き

なお寺の花まつりは、とてもにぎわった
そうだと。でもね、今ではその時期ともず
れてしまつて、幼稚園のあるお寺ぐらい
しか、盛大に花まつりを祝うことが、行わ
れなくなつちやつたように思えるんだ。

現にほらうちだつて、昨日あんなにみ
なで苦勞して作つた花御堂にも、お参り
してくれた人は数人しかいなかったじゃ
ない。それもみんな、今日が亡くなつた
方のお命日でみえた方だろう。花まつり
だけのために来てくれた人なんかはいよ
うだね。ちよつとさみしいきがするんだ。

そこでお父さんは考えたんだよ。昔あ
れほど盛大に行われていた『花まつり』
の心には、卯月八日として、山の神を田
に迎え稲の發芽を祝う心があつたと思う

んだ。つまり自然の誕生とお釈迦様の誕
生をかけていたんだね。

自然の誕生は神に御礼を言つていたわ
けだから、お釈迦様はその両親に、そし
てそれは私たちの両親に御礼を言う日にな
るわけなんだよね。だから『花まつり』
は仏教徒にとつての父の日、母の日にな
るわけだが、もう父の日、母の日はある
じゃない。だからお父さんはもっと大き
くとらえて『愛の日』にしようと思つた
わけさ。

バレンタインは女性から男性に物を贈
る日だろう。そして最近急に言われだし
たホワイトデーは、そのプレゼントをも
らつた男性がお返しする日だよね。だつ
たら何ももらわなかつた男性、まあそれ

に限らず男性が女性にお花を贈る日があつてもいいと思つたのさ。

『花まつり』をそういうふうに言つたら、きっとバレンタインやクリスマスにも負けないくらい有名になると思うんだがどうだろうね」

「ステキじゃないお父さん、昨日話してくれば、わたし学校でみんなにお話できたのに、女の子はみんな絶対喜ぶわよ」
ミーちゃんがすぐに言いました。

「男性がお花をプレゼントする習慣は、外国では一般的かもしれませんが、日本ではまだまだ少ないじゃありません」

お母さんが冷静に言いました。

「確かにそうだと思う。お父さんも今日お花屋さんで花束買うの、とっても勇氣

がいったよ。花束作ってもらうのを待つてる間、若い女の子がちらちらとお父さんを見るんでね。何かとても恥ずかしかったんだ」

「でもさ、最近の若い男の人って平気でお花買つてるわよ。わたしお花屋さんでよく会うもん」

「そうだよ、ミーちゃんが言うように、最近では若い人達は、平気になりつつあるんだよ。だからなおさら運動を始めるには、いいと思うんだ」

「お父さんがお花買うのとてもステキだよ。でもさ、明日雪降らないかなあ」

「こら、ミーちゃんたら」

三人にとってまさに驚きの花まつりでした。

◎ “維持会員” へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十八巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

ひ と く ち 俳 話 (12)

開帳

勝 崎 裕 彦

寺院で日を定めて厨子ずしなどの戸帳とちよう、扉帳ひちようを開いて、内部に安置した仏像や祖師像などが親しく人々に礼拝されることを開帳という。戸帳は、斗ますを伏せた形であるから斗帳とちようとも書くが、とばり、たれまく、たれぎぬである。開扉かいひ、啓龕けいがんともいう。啓龕とは、仏像を安置した帳台の龕を開くという意味合いである。普通は、三年目、七年目、三十二年目、あるいは六十年目などの特定の日を期して、秘仏や尊像を公開する場合をいうが、もちろん臨時の場合や参拝のたびごとに開かれる場

合もある。ほかのところに出張して行なう場合は、出開帳でがいちようという。これに對して、その土地で営まれる場合が、居開帳いがいちようである。

開帳の期日は、一般には春先から初夏、三月、四月の時節時候のおだやかなほどよい頃合いが選ばれる。参詣し、拝観する善男善女は、各寺院の秘仏を拝して、もとよりその信仰を確かめるのである。

開帳の時は今なり南無阿弥陀(虚子)

平生はめつたに拝むことのできない秘仏は、各寺院で大切に秘蔵されているものである。靈驗あらたかな尊像を心より拝して、その功德効験を素直にいただくことができれば、信心もますます強く深まることであろう。

開帳や小さな御像のありがたさ(裕彦)

観 音 さ ま (下)

ひろし
の
野
うえ
上

千手観音

千手観音は梵語でサハスラ・ブジャという。千本の腕を持つものという意味の訳である。この観音は詳しくは千手千眼観世音あるいは千眼千臂観世音といい、また千臂観音、大悲観音などともいう。密号は大悲金剛で、六観音の一つである。

その姿をみるに、左右二十一本の臂と、あと数百本の小さな手から成っているのが普通である。この観音の頭の数は十一面、二十五面など、二種類のものが残っているが、經典によると五百面のものまで説いているが、しかしそれは現在みることができない。臂の持物は不空罽索観音の象徴である獣を捉える縄

の羂索、揚柳觀音の象徴である揚柳などを
持っている。そのほかに、ヒンドゥー教のシ
ヴァ神の象徴である髑髏、同じくヴィシュヌ
神の宝螺貝を持つなど重層信仰の跡を示して
いる。

そもそも人々の觀音に対する期待は、年と
共に、信仰が広がると共にますます大きく
なった。そして人々は、さらに、絶大な力を
持つて私共を護ってくれる觀音を望むようにな
ったが、そこで遂に千本の手をもつ觀音を
造りだしたのである。このように変化し、ま
た最も複雑な形姿のものが、觀音の分身とし
ては最も強力な觀音として連華王の名さえつ
けられている。

千手觀音に関する經典は七世紀半ばころか
ら漢語に訳されはじめ、八世紀後半ころまで

の間に、十一種類の經典が訳されたが、この
ことはそれ程多くの信仰があつたことを示し
ている。そして中国、敦煌においてはかなり
多くの遺品を発見することができる。わが国
においてもこのほとけの信仰は、天平年間か
らおこつたようであり、日本の觀音信仰は千
手觀音をもつて頂点とするといつても差支あ
るまい。このころ唐より帰朝した玄昉が千手
觀音經一千卷を書写し、また唐僧鑑真が千手
觀音像をわが国にもたらして、平安朝の
時代に至るまで遺品の像が数多く造られてい
る。

千手觀音はその名称からもわかるように、
大悲心の限りない功德を私共に対して投げか
けてくれているのである。

馬頭観音

馬頭観音は梵名をハヤ・グリーヴァという。中国語では師子無畏観音と呼ぶ。六観音の一つである。八大明王の一つにも数えられる。この観音はヒンドゥー教のヴィシュヌ神の化身、ハヤ・グリーヴァ、「馬の頭をもつ者」が佛教にとりいれられたものである。馬頭を頭に安置するということは菩薩の姿としては異様な感もするが、これはヴィシュヌ神が馬頭に化身して、強大な力を発揮したという神話からきている。

その姿は忿怒の形相をしているが、観音のうちで忿怒の相を示しているのはこの観音のみである。忿怒の象徴である火炎状の光背を

持ち、頭上に化佛と白馬の頭を頂き、三面二臂、あるいは三面八臂のものが広くみられ、三面のうち二面がその左右にあつて怒りの面となっている。そして最後の一面が頂上にあつて馬頭がその上にある。

わが国にこの観音があらわれたのは西大寺の建立された前ころとみられる。その後は地方において信仰されていたらしい。そしてこの観音は一切の障害を打破ってくれるものだといわれている。古来、馬頭観音は寺院の境内は無論、路傍、あるいは街の四つ辻などによくみかける。この佛はわが国の人々の極めてあつい信仰の対象になっており、特に馬によつて荷物の運搬などをしていた時代には、馬の安全を祈る本尊として人々からあつく尊崇されていたものである。

不空^{ふくうけんじやくかんのん}絹索觀音

この觀音は「フクウケンサクカンノン」とも読む。梵語をアモーガ・パーシャという。

これは「物を捕えるに失敗することのない絹索をもつ者」の訳である。この觀音の別名を不空廣大、明王觀世音などともいう。密号は等引金剛で、六觀音または七觀音の一つとされる。

この觀音の姿をみると、多種多様であつて、きまつた形姿がない。自在王咒經によると、この觀音は一面、三目、四臂の像を説く。身色は黄色で、四臂のうち、左の上手に蓮華をとり、下手に澡瓶を持ち、右の上手は施無畏印、下手は数珠をとる。胎藏界漫荼羅におけ

る像は三面四臂で、各面に三目があり、正面は肉色、右面は青色、左面は黒色である。この三面は貧、瞋、癡の三毒の実相をあらわしている。そして四臂のうち、左の第一手は蓮華、第二手は絹索、右の第一手は念珠、第二手は瓶を持つ。その他には一面八臂の像もある。また顔に怒りの表情を含めた、しかも相好の姿をしたものである。

不空絹索觀音像はインドでは発見されていないが、しかし、アモーガ・パーシャはインドにおける觀音のローケーシュヴァラの一つの名であり、チベットにはこの觀音の像がみられ、敦煌にも一面六臂像の壁画がある。東大寺三月堂の本尊はわが国天平時代の代表作でおる。

この觀音の成立したのは十一面觀音と同時

期とみられている。この観音に対する信仰はわが国においては天平時代からとみられる。この観音は強大無比の威力を持ったほとけであり、人間が煩惱のままに行動しないように人間を縛りとどめる縄を持っているものと理解されている。そしてこのほとけはその名の通りに網で魚をすべて救いあげるように、一人残らず信者を救ってくれるものと考えられている。

准胝観音

准提観音とも書く。准胝は梵語チュンディの音写である。詳しくは七俱胝佛母准胝といい、それを略した准提佛母ともいう。また尊那ということもあるが、これは准胝の転音し

たものである。六観音の一つである。チュンディはもと密教の女神であるが、のち観音の一つとされた。

この観音に関する独立した經典で、中国に知られたのは西暦紀元六八〇年ころのもので七俱胝佛母心大准提蛇羅尼經である。そして一部には観音ではないという説もあったが、しかしこの經典によって観音の一つとされたのである。

このほとけの姿は、頭部に化佛をつけていない。儀軌によると、正確に造像された場合には、一面、三目、十八臂像であるが、このほとけの像は二臂をはじめとして、その他多数の腕を持つものをつくることができる述べており、その姿はまったく一定していないのである。

この観音は過去から未来にかけて多くの
人々の外的厄難、精神的災難、および精神的
な迷いを除き、さとりの道を安全に歩ませる
と誓願を持ったほとけである。また女神であ
るところから佛母と呼ばれ、わが国では特に
子授けと安産の観音として、女性を中心に広
く尊崇されてきたのである。このように、こ
の観音は物質のみでなく、精神的な迷いから
人々を救うというところに意味があり、その
点においては観音の性格を少しはずれている
といえなくもない。

密教において、この観音を本尊として除災、
延命、子授け、安産を祈願する修法を「准提
法」という。

如意輪観音

如意輪観音は六観音または七観音の一つで
ある。經典によると如意輪観音とは「車輪を
もつ如意珠」の意味である。

如意輪観音の像に多面のものはない。臂の
数は二本、四本、六本とさまざまであるが、
經典の記載するところによると、二臂で、右
手に如意宝珠を捧持し、左手に観音の象徴で
ある蓮華を持つ。ところがわが国では、平安
朝時代以後になって盛んにつくられた六臂像
では、左第三手に法輪を持っている。いずれ
にしてもこの観音像は膝をくずした、安楽な
坐り方をしている、いかにも人間に親しみを
感じさせる恰好をしている。

如意輪観音は車輪がどこまでも転がってゆくように、意のままにどこへでもあらわれて、衆生を救うほとけという意味で多くの人々に繁栄と財宝を与えるほとけとされている。そしてその繁栄や財宝を授けるのは、物質に限らず、福德や智慧をも授けることを誓願としている。したがって単なる現世利益的なものにとどまらず、佛教的信仰をその背後につよく持っているということが知られる。また、密教修行者の本尊としても知られていて、密教僧侶の修行の段階でこの観音を礼拝することも行なわれている。しかしこの観音は大日経には説かれていない。

この観音はあらゆる方角に顔を向けた十一面観音でも、千本の腕を持って衆生を救済するという千手観音でも満足することのできな

くなつた信者の願いが、いずこにあつても、車輪を持ってきて、救済してくれるというような観音を自然に産みだしたものと考えられる。

平安時代にわが国に伝えられた如意輪観音の普通の姿は六臂であり、現在、「三如意輪観音」として有名な河内の観心寺の本尊、大和の宝生寺の本尊、兵庫の神呪寺の本尊の三体はいずれもこの時代の傑作である。

以上のほか、人々から多くの信仰をあつめている観音として、水月、魚籃、白衣、葉衣、揚柳、毘俱胝等もある。なお毘俱胝は毘俱胝菩薩と呼ばれているが、密教において信仰されており、女性神の一尊であるが、観音菩薩の分身とされている。

(了)

◎『浄土』表紙版面絵販売についてのご案内

『浄土』四月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版面絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版面掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度及び一昨年度の版面絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒103 東京都千代田区飯田橋二―二―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

壬申の年(2)

天皇（すめろぎ）の真名読み難し春燈下
文献を読んでいるうちに、ふと頭に浮かんだ一句である。読み難しと綺麗事を言っているが、読めないと言ったほうが正直だろう。まさにこれはもう半じ物である。本当に、当

木^{きの}下^{した}隆^{りゅう}一^{いち}

（随筆家）

時はこんな呼び方をしていたのであろうか。
例えば欽明天皇は天国排開広庭（あめくにおしはらきひろには）、敏達天皇は訳語田渟中倉太珠敷（おさだのぬなくらのふとたましき）なのである。呪術的な意味があるのかな、落

語の「寿限無」だなあ、これは、などと余計なことを考えるのは、目の衰えからくる疲労のせいだろうか。

それはさておき、公式記録には、仏教は欽明天皇の一三年（五五二—皇紀一二二二年）に、突然伝来したかのように書かれ方をされているが、それ以前に帰化人の某が仏像を祀っていたという記録がないではない。史書ではこれを私的伝来としてあまり重要視していないが、この時代すでに仏教は我が国にかなり浸透していたのではないだろうか。少なくとも蘇我稲目の出身地である越前国では、広く行われていたような気が私はするのである。そう考えなければ、伝来はやほやの仏教を、稲目が執拗に推した意図があやしくなる。人間そうそう急にマニアックになれるもので

はないからである。

蘇我氏は氏族の心の拠り処として、古くから仏教を信仰していた。勿論大和の豪族も一族をまとめる手段として、それぞれ独自の信仰（便宜上土俗信仰としておく）を持っていたが、他氏族と同一の神を祀るのではなく、多分に閉鎖的なものであったし、信仰の対象となるものも漠然としていた。それに比べると仏教は開放的であり、仏像という目に見える対象があったし、何よりの強みは、人々を説得する教義を記した經典が存在したことであった。人心を収攬するのにこちらが有利なことは、火を見るよりも明らかなのは言うまでもない。

稲目が大臣（おおおみ）として歴史に登場するのは、第二八代宣化天皇の第一年（五三

五年）からで、繼体天皇の歿後四年目のことである。その間に繼体天皇を継いだ第一皇子の安閑天皇を廃し、第二皇子を擁立して宣化天皇としているのだから、なかなかの辣腕家である。この事一つをとってみても、稲目は繼体天皇の在位中からすでに朝廷の中枢にあつたことが窺える。しかし、この宣化天皇も在位は四年と短く、第四皇子が即位として欽明天皇となつてからも、稲目は大臣の地位に止まっている。次々に天皇が交代しているので、長い年月が経っているような錯覚にとられるが、仏教伝来の年は繼体天皇が大和入りした年から数えても、僅か二五年後のことなのである。

大和の豪族、中でも軍政面を司る大伴氏や物部氏は繼体王朝の軍門に降つた経緯はあつ

ても、依然蘇我氏と拮抗する勢力を維持しており、土俗信仰による同族間の結束は侮り難いものがあつた。しかし、大和の地にも仏教は徐々にではあるが確実に浸透して行つた。二十五年間、稲目は大連（おおむらじ）である物部尾輿を屈服させる機会を持ち続けた。そして機熟せりと見るや、百濟の聖明王に要請して、仏像と經典を貢物の形で贈つてもらつた。稲目にしてみれば、天皇のお墨付きを得て、一気に反対勢力の一掃を目論んだのであるが、両者のバランスの上に立つ天皇は、仏教に疫病退散の力があれば認めようという裁定を下したのであつた。結果的には実効が上がらず、仏像などに尾輿の手の者によつて難波の堀江に棄てられてしまうが、大和からわざわざ難波まで棄てに行くというのも、こ

苦勞な話である。

同じような争いが敏達天皇の下でも、稲目の子馬子と尾興の子守屋との間で起つてゐる。一つの事実が二様に伝わったとも考えられるが、それぞれ父の意志と繼いで息子達が宗教を政争の具に覇権を競つたと見るのが妥当であろう。結局守屋は皇位継承問題のもつれから馬子が率いる連合軍に破れ、物部氏は滅亡するが、「日本靈異記」はこれを仏罰を蒙つたと結んでゐる。單純に考えれば蘇我氏と物部氏の勢力争いの結果と受け取れるが、実は土俗信仰が仏教に破れた宗教戦争だったのである。仏教伝来から約三五年にして、仏教は我が国の宗教として公的な地位を確立したのである。

次の壬甲は、六一二年（皇紀一二七二年）

推古天皇の二一年であつたが、特に目立つた記録は残っていない。

この六〇年の間に天皇の入れ替わりは激しい。即ち欽明・敏達・用明・崇峻・推古と五代を数えるが、敏達以下はいずれも欽明天皇の子供で、この他にも穴穗部間人皇女と穴穗部皇子がいるが、何番目の子供であつたか記録はない。皇女は異母兄の用明天皇の皇后となり厩戸皇子（後の聖德太子）を産むが、皇子は敏達天皇の歿後即位しようとしたが果たせず用明天皇の歿後再び即位を図つたが、馬子らによつて物部守屋と共に肅清されてしまった。この皇女と皇子の母は稲目の娘小姉君だから、争つた皇子と馬子は甥・伯父の關係だし、仏教を目の敵にしていた守屋がその皇子と結託して勢力挽回を策したのだから、

話はややこしい。

第三一代用明天皇、後に敏達天皇の皇后から第三三代推古天皇となった額田部皇女の母も稲目の娘、堅塩媛であつた。稲目は何人妾腹の娘を欽明天皇に押し付けたのかしらないが、欽明天皇の後を継いだ四人の天皇のうち、崇峻天皇の母も小姉君だから、三人までが稲目の娘達の産んだ子である。そして、この四代の朝廷を牛耳つたのが、稲目を継いで大臣になつた馬子であつた。外戚の長として絶大な権力を持ったこの馬子を、天皇だつたとする説があるが、蘇我氏一色の天皇家の系図を見ると、蘇我王朝の感は否めない。馬子は甥や姪の天皇の生殺与奪の権を握っていたのだから、陰の天皇だつたとしても一向におかしくはないのである。

祖父の稲目や伯父の馬子が熱烈な仏教信者であつたにも拘らず、馬子の甥の諸皇子はそれほど仏教に関心を示さなかつた。政を私する馬子に対する反発もあつたのであろう。排仏論者の物部守屋と手を組んだ穴穗部皇子も、また第三二代崇峻天皇も馬子によって暗殺されたが、それは排仏的な言動が高じて馬子の不興を買つたからではないだろうか。それに引き換え、皇女のほうはいずれも熱心な仏教徒だつた。敏達天皇も、用明天皇も、後にはそれぞれの皇后に感化されて仏教に帰依しているが、馬子の目をそらすためのカムフラージュだつたかもしれない。しかし、政略結婚の道具でしかなかった女性は、果敢無い身の行く末を案じて仏にすがる心が強かつたから、全身全霊で仏教にのめり込むことがで

きたのであろう。

何代も前の皇后を何と呼んでいいのか分からないので、敏達天皇を取り敢えず敏達皇后としておくが、彼女にも意地があつた。崇峻天皇を暗殺した伯父馬子から即位を要請された時、一旦は固辞し、用明天皇の遺児厩戸皇子を推したが、これは、皇子の若年を理由に馬子の容れるところとはならなかつた。本当は皇子の聡明さを馬子が嫌つたのであるが……。結局、皇子を皇太子と認めるならばとう条件付きで、彼女は要請を受け容れ、第三代推古天皇となつたが、自分はいくまでもつなぎで、機を見て聖徳太子と改名した皇太子に譲位するつもりでいたのである。

なぜこのように彼女が聖徳太子に固執したかという、同腹の弟用明天皇がまだ皇子の

頃、異母妹の穴穗部間人皇女を皇子に娶したのは彼女であつた。同じ敬虔な仏教徒として敏達皇后は、この年若い皇女を愛していたのである。そして、実子のいなかった彼女は生まれてきた厩戸皇子を実の子のように慈しみ、また、その聡明さをこよなきものに思い、仏の道を説いて養育したのであつた。即位するや否や天皇は太子を摂政に据え、以後治世三六年の間政治には一切タッチせず、仏道三昧と物見遊山に明け暮れた。これは馬子に対する彼女のせめてもの抵抗であつたが、それができたのは聖徳太子という後ろ盾があつたればこそのことである。

聖徳太子が挙げた大きな業績としては、冠位一二階と憲法一七条の制定が言われるが、遣隋使の派遣や仏教の興隆を忘れてはならな

い。殊に古代仏教はこの人がいなければ、現在我々が目にすることができるような発展を遂げたかどうか甚だ疑問だからである。しかし、これらのことも、すべて蘇我氏の同意がなければできないことであつた。摂政とはいへ、太子は独断専行することなく、むしろ蘇我氏の意に沿つた政を行つたので、大臣として権勢並びなき馬子もけちのつけようがなく、娘を贈つてご機嫌を取り結んだ節さえ見えるが、煙たい存在であることには違ひなかつた。

六二二年に太子が、その四年後に馬子が、更にその二年後の六二八年に推古天皇が歿して、天皇家と蘇我氏の密月時代は終焉した。

聖徳太子の歿後、老齡の馬子に代わつて大臣となつた蝦夷の専横ぶりは、太子という障

壁が取り払われただけ、馬子のそれに輪をかけたものとなつた。その始めは、皇位継承に辣腕を振るつたことである。他に人がいなかった訳でもないのに、蝦夷は敏達天皇の皇女糠手姫と皇孫押坂彦人大兄皇子との間に生まれた王子を拔擢して第二四代舒明天皇とし、舒明天皇が亡くなると、その皇后（敏達天皇の曾孫茅渟王の娘）を即位させ、第三五代皇極天皇としてゐるのである。どちらも敏達天皇の血筋といつても、どうしてもこの人でなければならぬという強い根拠はない。恐らく己の意のままになりそうな人物を探し出して来て、強引に位につけたのであろう。第三四代の天皇になるには最もふさわしい人物、山背大兄王という人がいたにも拘わらずである。

（続く）

◇ ◇ ◇ 新購読会員のご紹介を ◇ ◇ ◇

月刊紙『浄土』の刊行、なんとか続けているという現状です。編集にも遺漏が多く、また校正のミスも相変わらずです。出版印刷をお願いしている方々にも、きびしい業界の昨今のありようの中で、ともかく懸命のご配慮をいただいております。わずかの人数での雑誌出版、発送をめぐるさまざまな営み、ともかく『浄土』の灯を消すことなく、法然上人鑽仰会の六十年にならんとする歩みを止めることはありません。失敗や不手際の多いことながら一步一步の歩みを今後もしずつ進まなければなりません。

会員読者諸兄にご迷惑をおかけすることも決して少ないことではなく、この上なにかをお願いもできにくいことではありますが、どうぞ今後とも暖かいご助成、ご支援を切にお願い申し上げる次第です。一ページ、ポツカリあいた埋め草として、心よりの謝意にあわせて、臆面もないお願いを記させていただきます。

法然上人鑽仰会

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努めています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ風におまとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六～十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円
(送料不要)

浄土 五十八巻 四月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

平成四年三月二十五日 印刷
平成四年四月一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷所 (有)小暮製本印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三三二六二)五九四四
〒二〇二(振替)東京八―八二一八七

◇◇◇好評の新刊◇◇◇

教訓仏教語辞典

栗田順一編 価格一六〇〇円

○仏の教えはいつも新しい！

日常用語として使っている仏教語も、その意味をよく理解してみると、私たちの暮らしに密着した教えが多い。本書はなじみ深い仏教語の意味を生活に密着したかたちでわかりやすく説いている。

〈出版・発行〉

東京堂出版 東京都千代田区神田錦町三―七 電話(〇三)三三三三三―三七四一

*浄土宗出版室において特価で販売しています。

お申し込みは浄土宗出版室 電話(〇三)三四三六―三三五一まで。

第五十八卷

四月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
平成四年三月二十五日印刷 平成四年四月一日発行